

音楽の散歩道 その10の8

— ベートーヴェンの「第9」200年記念 —

悲しみと苦悩に満ちた真実のショパン、ショパンを見守るサンドとリスト(6)

| 鹿児島市 |

| 東区・荒田支部 |

| 大海クリニック・大海宮崎クリニック |

| 加治木温泉病院 |

栗 博志

栗 隆志

大西 浩之・海江田 寛

夏越 祥次

〔Part 24〕リスト、メンデルスゾーン、そしてショパンの人生

〔2〕フェリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ (1809 - 1847)
(つづきの2)

最後に、シューマンとシューベルトに関し若干、付け加える。

シューマン (1810-53) が、本格的にピアニストを目差したのは成人後で、スタート時点で、既に大きな遅れ、ハンディキャップがあった。

遅れを取り戻そうとあせり、過激な訓練で指を痛めた彼は、泣く泣く作曲家に転身したが、懸命の努力で、作曲家としての業績を打ち立てる事ができたのである。

シューマンは、4曲の交響曲を残した。

- ・「第1番・春、1841」は、ベットガーの「春の詩」にインスピレーションを得て作曲された。

4楽章の各々に、「春のはじめ」などの標題がついている。

- ・「第3番・ライン、1850」は、ライン地方を旅行した時の印象を基に書かれ、ケルン大寺院の印象なども、曲に反映されている。
- ・「第4番、1841、改訂51」は、当初は「交響的幻想曲」なる標題が付されていた。実際の初版は、2番目に作曲され、妻クラ

ラの22歳の誕生日にクララに献呈された。

第1、2番は、友人であり、音楽院の教授に招いてくれる事となるメンデルスゾーン指揮、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団により初演されている。

図205は、ウォルフガング・サヴァリッシュ指揮の全交響曲の録音 (1972録音、CD)。

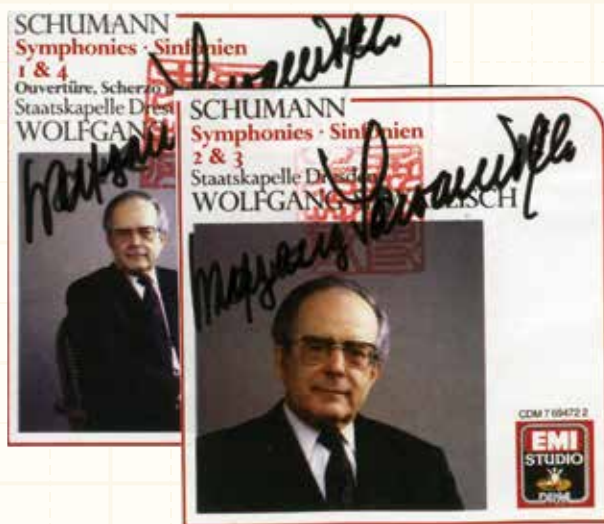


図205 シューマン「交響曲」全集
ウォルフガング・サヴァリッシュ指揮
スターツ・カベル・ドレスデン (1972録音)

図206は、ジュゼッペ・シノポリ指揮である (1992 - 93録音、CD) である。サイン入りのこのCDが私の手元にあるのは、幸運であった。

さてシューマンには、ピアノ曲なのに「交響的練習曲、Symphonische Etüden、1834」と名付けられた曲がある。

これは、主題と変奏曲形式の練習曲である

が、「交響的」という所に努力家シューマンの意欲、創意がうかがえる。

シューマンは、このピアノ曲を交響曲のような音響を持つピアノ曲として作曲したのである。



図206 シューマン「交響曲」全集
ジュゼッペ・シノポリ指揮
スターツ・カペル・ドレスデン
(1992-93録音)



図207 シューマン「交響的練習曲」
イーヴォ・ポゴレリチ (©1982) (サイン有)

図207は、イーヴォ・ポゴレリチ (1982©) のLPである。DG社のLPでは、黄色の枠内にサインする音楽家が多い。

ショパン・コンクールで、イーヴォが振り落とされた事に怒った審査員、マルタ・アルゲリッチが退席した事はよく知られる。

ピアノ・コンクールの判定には、フィギュ

ア・スケートのような厳密な判定基準が多分無く、公平性がないからである。

そもそもピアノ演奏に優劣はつけられない。

シューマンには、同様の曲がもう一曲ある。「管弦楽なしの協奏曲、英語では Concerto without Orchestra, 1835」である。

通常「ピアノ・ソナタ第3番、ピアノの為の大ソナタ」と呼ばれる。これも協奏曲風に作曲されているからである。

私は、ウラディミール・ホロヴィッツやアルゲリッチらは、シューマンは弾かないものと思っていたが、2人共シューマンを意外と好きだったのではないかと、とも考えるようになってきている。

シューマンの曲の中には、何か人を引き付けるものがあるのだろう。

彼の曲は、演奏者によっては、凄い曲に変身する可能性を秘めている。

さて、1975/76 シーズンは、ホロヴィッツの「全米コンサート・ツアー、25周年」に当たる。図208は、その記念盤の豪華LPである。表面の文字は、盛り銀である。



図208 ホロヴィッツ「全米ツアー25周年記念」盤LP.
シューマン「管弦楽なしの協奏曲」

貴重なLPで、下部には彼のサインと1976年の年号入りであり、世界でも何枚もないだろうと思われる。

ジャケットの写真では、多くの女性が舞台に群がり、ホロヴィッツが笑顔で答えているのが分かる。

そして、説明に「RCA レコードが歴史的音楽ツァーの、このレコードを提供できるのは、正に誇りである」と記されている。

そして、選ばれた曲は、第1曲目が、シューマンの、「Concerto Without Orchestra」であり、2曲目がスクリアピンの、「ソナタ・第7番」である。

あまり、コンクールのことは、触れたくないが、マルタ・アルゲリッチは、57年の「ブゾーニ」「ジュネーヴ」そして65年の「ショパン」コンクールの優勝者である。

彼女のアメリカ・デビューは、翌66年1月にNYのカーネギー・ホールで行われた。ピアニストにとって米国デビューは、最も重要な演奏会である。

ショパンの優勝者ともなれば、プログラムには通常、ピアノ・ソナタの2曲（第1番は除く）の内のどちらかを必ず入れるだろう。

残念ながらショパンのピアノ独奏曲の大曲は、このたった2曲しかないからである。

日本人なら、オール・ショパン・プロを組むかもしれない。と言うのは、多分ショパンしかレパートリーが無いからである。

ただ、ショパンのソナタは、誰が弾いても大差ない演奏となる。そこがショパンの長所でもある。個性が出しにくいのである。

日本では、それで通用しようが、米国では通用しない。米国には世界的ピアニストが目白押しだし、ハロルド・ショーンバーグのように演奏家に付度しない批評家もいる（ハロルドが、グレン・グールドは、ピアノを速く弾けない、とかバーンスタインはだめ指揮者だ、と批評しても誰も反論できない）。厳しい世界である（現在このような批評家は、存在しないだろう）。

この時のアルゲリッチのプログラムは、「プ

ロコフィエフの7番」、リストとショパンの小曲6曲、そしてシューマンの「幻想曲」である。

「幻想曲、1836」は、当初はクララに、後にはリストに献呈されただけあり、演奏によっては、効果は非常に大きい。

このプログラムで、アルゲリッチは圧倒的な実力を見せつけている（図209）。



図209 マルタ・アルゲリッチ、U.S.デビュー（1966年1月、カーネギー・ホール）
シューマン「幻想曲」

また、ショパンの小曲の中の1曲が練習曲、作品10-4である。リストに献呈された作品10の中で「Presto」で弾くように指定されているのは全12曲のうちの、この1曲のみである（リストの恋人、マリー・ダグーに献呈された作品25の12曲のうち、プレストの曲は、これまた25-2の1曲のみである）。

この演奏会で、何の制約もなしに弾かれたこの練習曲の演奏は、マウリツィオ・ポリーニも含め、他の演奏者の追随を許さないものであるし、次の「夜想曲、作品15-1」と共にホロヴィッツの若かりし頃を髣髴とさせる演奏であった。

ともかく、この演奏会では、若き日のマルタが並の優勝者とは、比較にならない実力の持ち主である事を示している。

アルゲリッチとシューマンに関しては、

1983年には、「子供の情景」と「クライスレリアーナ、1838」も録音している。後者はショパンに献呈された（図210）。

図211は、シューマンのヴァイオリン・ソナタ第2番他、全7曲の室内楽の演奏（2CD、1995）である。ミッシェ・マイスキ、ナタリ



図210 マルタ・アルゲリッチのシューマン「子供の情景」「クライスレリアーナ」（1983、録音）



図211 シューマン「室内楽曲」マルタ・アルゲリッチ、今井信子他（1995、録音）

ア・グートマンらに混じり、日本を代表するビオラ奏者の今井信子の姿も見られる（右から3人目）。

アルゲリッチのサービス精神からか、表紙のほかに、内部のポートレートにもサインがある。

前記のようにシューマンは、「管弦楽なしの協奏曲」のように、ピアノ曲に工夫を凝らしているが、このように、管弦楽を伴わぬ、鍵盤楽器単独の為の協奏曲は、以前よりある。

代表的でよく知られているのが、バッハがライプツィヒ時代に書いた「クラヴィア練習曲集第2部」の「イタリア協奏曲」である。

図212は、ピーター・ゼルキン（1994録音）の「イタリア協奏曲」と「ゴールドベルグ」。



図212 バッハの「イタリア協奏曲」1台の鍵盤楽器で演奏される協奏曲ピーター・ゼルキン（1994、録音）

シューベルト（1797 - 1828）は、わずか31歳で死去した。ショパンが39歳であったのに比べると8歳も短い人生であった。

彼は、ドイツ歌曲（リート）の王とも呼ばれる、ロマン派音楽の開拓者である。

彼は、小学校校長の父からチェロを、ウィーン宮廷礼拝堂合唱団時代に、サリエリに若干、音楽理論を学んだだけで、ほぼ独力で才能を開花させた勤勉な努力家であった。

その点では、シューマンと似ている。

1821年（24歳）の時、私も中学の音楽の時間に習った、作品1となる「魔王」が出版されたが、それまでに700曲近くを書いたと言われている。

彼は、31年の短い人生にもかかわらず、オペラ15曲、交響曲9曲、室内楽曲38曲、



図213 シューベルト「交響曲第4番、悲劇的」「交響曲第8番、未完成」
カルロ・マリア・ジュリーニ指揮、シカゴ響（1978年録音）



図214 シューベルト「交響曲第9番」
ギュンター・ヴァンド指揮、ケルンR響（1978録音）

ピアノ・ソナタ21曲、膨大な数の歌曲などを残した。

図213は、「交響曲第4番・悲劇的、1816」、「交響曲第8番・未完成、1822」のLPである。第8番は、1865年に発見された。

カルロ・マリア・ジュリーニ指揮、シカゴ響（1978㊦）である。

図214は、「交響曲第9番、大交響曲、D944、1828」のLPである。

この交響曲は、第10番と言われる事もある。シューベルトの死後10年目に、シューマンが自筆譜を発見し、1839年にメンデルスゾーンの指揮でライブツィヒで初演された。

ギュンター・ヴァンド指揮（1978㊦）。

ジュリーニ、ヴァンドのサインは貴重。

リストの2つの交響曲のうち、「ダンテ交響曲」はワーグナーに、「ファウスト交響曲」はベルリオーズに献呈された。

ワーグナーは、リストの義理の息子となる。

リストは、ベルリオーズを援助し、「幻想交響曲」をピアノ編曲し、ピアノが交響曲に匹敵する楽器である事を証明した。

メンデルスゾーンは、ライプツィヒ音楽院にシューマン、ジェニー・リンドらを教授として招き、ジェニーの声質、声域に従い、名曲、オラトリオ「エリア」を作曲した。

メンデルスゾーンは、ジェニーと非常に親しかったし、ジェニーはショパンとも非常に親しかった。

シューマンは、「クライスレリアーナ」をショパンに献呈している。

またワイマールのゲーテを通じ、メンデルスゾーンとリストは間接的ではあるが、深くかかわっている。

リストは、シューベルトの膨大な歌曲をピアノ編曲し、彼を世に広く紹介した。

初期ロマン派の音楽家達は皆、協力・助け合って自分の道を拡大しながら、進んでいったのである。

ショパンを除いては……………。

＜付録＞モーツァルト(1756-91)とバッハ
1781年、ザルツブルグで大司教と決別して以後、モーツァルトはウィーンに定住。

ウィーン時代から、彼は使用楽器を、チェンバロからピアノに変更し、ピアノ演奏と作曲で生計を立てる事となる。

モーツァルトは、30歳前後からバロック音楽にも関心を抱き始めた。

古典美へ目を向ける余裕がでてきたのだろうと思われる。

室内楽曲としての「バッハの作品による6つのアダージョとフーガ、K.404a、1782」は、本人作か否かは疑問はあるが、「5つのフーガ、K.405、1782」は、バッハの「平均律クラヴィア曲集」からの編曲作品である。

その他、「アダージョとフーガ、1788」、「フーガ・ハ短調、1783」やヘンデル様式によるバロック組曲（アルマンド、クーラント、サラバンド）である「ピアノ組曲・ハ長調、1782」、未完ではあるが4曲の「フーガ」、更には「幻想曲とフーガ・ハ長調、1782」などを作曲したが、これらはバッハやバロック音楽への関心の深さを示唆する実例と言える。

「トッカータとフーガ」「前奏曲とフーガ」



図215 「半音階的幻想曲とフーガ」
ロザリン・テュレック (LP、1979録音)

「幻想曲とフーガ」「前奏曲とパルティータ」などは、バッハ御得意の作曲パターンである。

バッハの「半音階的幻想曲とフーガ」は、古来チェルニーやビューローが校訂し、ベートーヴェンが筆写し、メンデルスゾーン、リスト、タールベルグ、ブラームスらが演奏した事でも知られ、今日でもよく演奏される。

図215は、本曲のロザリン・テュレック演奏のLP（CBS“Masterworks”のデモ用、1979録音）で貴重。



図216 「半音階的幻想曲」
グレン・グールドは、これに続く「フーガ」の録音を残す事はできなかった（CD、1979録音）。世界企業として、センスの悪いカバーのデザインを何とかしてほしい。

図216は、グレン・グールド演奏の「半音階的幻想曲」（CD）である。

グールドは、1979年にこの曲を録音した。然し、1982年に死去した彼は、後半の「フーガ」を残す事はできなかった。

多分、彼は「半音階的」作品が好きではなく、早期に録音しなかったのだろう。

それ故、この幻想曲が録音されただけでも、私達にはラッキーだったと思う。

＜付録＞ベートーヴェン(1770-1827)と
バッハ

ベートーヴェンは、ボン時代の幼年期以来、

ボンの宮廷オルガニスト、ヴァン・デン・エーデン、トビアス・プファイファー、更にクリスティアン・ゴットローフ・ネーフエにピアノやオルガンなどを学んだ。

ネーフエの師のヒラーは、かつてバッハが勤務していたライプツィヒの聖トマス教会の合唱長であり、バッハの伝統を引き継いでいたのである。

そんな縁もあり、ネーフエがベートーヴェンに伝統的古典楽式（バッハなど）を教えたが、演奏教材の1つとして、バッハの「平均律クラヴィア曲集」を与えた事、そしてベートーヴェンが、それを忍耐強く習得した事は、よく知られている。

ネーフエは、ベートーヴェンを、ボンの楽団現場で演奏させ、実地教育した上、14歳の時には、ボンの宮廷楽団の自身の正オルガニストに次ぐ、次席オルガニスト（年俸150グルデン）に推薦し、生活面での援助をすると共に、実戦でも音楽を着実に身に付けるよう指導したのである。

ベートーヴェンにとっては、全くありがたい師であった（リストにとって、同様の師がチェルニーやサリエリであった）。

母、マリア・マグタレーナの死（16歳の時）以後、酒浸りの父と2人の弟達を抱えながら、ベートーヴェンは成長したのである。

ベートーヴェンは苦労人であった。

バッハ音楽の勉強の成果は、彼が生涯に亘り書き続けた、ピアノ・ソナタの中の後期の5曲のソナタの中のフーガに結実している。

ベートーヴェンは、第28、29、30、31番の4曲のピアノ・ソナタを、「ハンマークラヴィアの為のソナタ」と書き記しているが、今日、「ハンマークラヴィア」と呼ばれる、第29番の第4楽章、「ラルゴ～アレグロ・リゾルト、序奏とフーガ」の壮大なフーガは深遠である。

ハンス・フォン・ビューローは、各24

曲の「プレリュード（前奏曲）とフーガ」から成る、全2巻の「平均律クラヴィア曲集」を「旧約聖書」に、ベートーヴェンの「32曲のピアノ・ソナタ」を新約聖書に準えた事は、既に何度か述べた所である。

図217は、ルドルフ・ゼルキンの「ハンマークラヴィア」のLP（1969-70、録音）、図218は、ポリーニのLP（1976-77、録音）であり、共に20世紀を代表する2人の名ピアニストの勝れた演奏である。



図217 「ハンマークラヴィア」
20世紀を代表するピアニスト、ルドルフ・ゼルキン（LP、1969-70録音）



図218 「ハンマークラヴィア」
20世紀を代表するピアニスト、マウリツィオ・ポリーニ（LP、1976-77録音）

ソナタの他の大曲の、「エロイカ主題による15の変奏曲とフーガ」のカノンおよび、フーガ風の終曲、*Finale alla Fuga* や、「ディアベリのワルツによる33の変奏曲」の、プレリュード的な第31変奏に続く、第32変奏のフーガにも、バッハの影響が見て取れる。

「エロイカ主題」で思い出したが、1980年代末までの鹿児島クラシック音楽熱は強く、活気があった。



下 福 力

東京学芸大学音楽科卒業、同専攻科修了。

図219 下福力氏（演奏会パンフより）
お会いした事はないが、謙虚な挨拶文と手堅い演奏が記憶に残る。

86年には、「下福力ピアノ・リサイタル」があり、「エロイカ主題」を聴いたが、手堅い、いい演奏で記憶に残っている（図219）。

さて、ベートーヴェンの弦楽合奏曲には、2、3、4、5重奏曲があるが、質・量共に優れているのが弦楽4重奏曲で、第1～16番の番号が付けられた作品の他、「大フーガ」などがあり、ロブコヴィツ侯爵、ガリツィン侯爵、ラズモフスキ伯爵らに献呈されている。

バッハに関するものは、弦楽四重奏曲としては、ルドルフ大公に献呈した、「大フーガ」、「前奏曲とフーガ、ハ長調」「前奏曲とフーガ、ヘ長調」があり、弦楽5重奏曲として、「フーガ、ニ短調」がある（図220）。

更には、平均律クラヴィア曲集第1巻の

「変ロ短調のフーガ」のレントの美しい5声のフーガの「弦楽5重奏曲への編曲」や、オルガンの為の「2声のフーガ」を書いている。

以上、ベートーヴェンにとって、バッハは切り離せない存在である事が分かる。

図221は、アルバン・ベルグ・カルテット



図220 ベートーヴェンが弟子で最大のパトロンの一、ルドルフ大公に献呈した「大フーガ」



図221 ベートーヴェン「弦楽4重奏曲」
アルバン・ベルグ・カルテット（1LP、1982録音）

(1LP、1982、録音)である。全員のサイン入りである。

図222 (a) (b) (c) は、ベートーヴェンの弦楽4重奏曲全曲盤(第1～16番と大フーガ)である。(a) はクアトゥール・タリヒ(10LP、1977～82、録音)、(b) はカルテット・イタリアーノ(10LP)、(c) はザ・ファイン・

アーツ・カルテット(9LP)である。

例えば(a)を製作するには、5年の年月を費している。10枚のLPのボックスを持つと、ずっしり重い。その重さに私は、ベートーヴェンの音楽の重さと、彼の音楽を音の記録として残そうとする演奏家の執念の重さを感じずにはいられない。



(a) クアトゥール・タリヒ
(10LP、1977-82 録音)

(b) カルテット・イタリアーノ
(10LP)

(c) ザ・ファイン・アーツ・カルテット
(9LP)

図222 ベートーヴェン「弦楽4重奏曲」全曲集(3セット)

いずれも演奏者全員のサインがあり、貴重なものである。

以上、ここまで長い道程ではあったが、ショパンの周囲の音楽家達、特に[1] リストと[2] メンデルスゾーンが、若い時代にどのように音楽と関わってきたか、あるいは文学を含む芸術、旅行、友人、知人、芸術家達と如何に係わってきたかを述べ、そしてシューマン、シューベルトにも若干言及し、更にはモーツァルトとバッハ、ベートーヴェンとバッハの関係までも述べてきた。

今まで述べてきた基礎知識をもとに、ショパンの死(1849年)から、177年後の今日に至るまで、フィクションの世界で語られてきた幻想のショパンから、厚いベールを引き剥し、ショパンの真実の姿、真実の人生に迫る事が本稿の目的であるが、いよいよ次号からショパンの世界に足を踏み入れる事としたい。

(つづく)